

タイトル:平成 27(2015)年度 研究セミナー(第 16 回)

日程:平成 27 年 12 月 18 日(金)~20 日(日)

場所:東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所 3 階 マルチメディアセミナー室(306)

「文化としての沙漠開発」

竹村 和朗 (東京大学大学院)

今回、私が研究セミナーに参加した最大の目的は、目下執筆中の博士論文について考えをまとめること、中でもここ 1 ヶ月ほど私を悩ませている博士論文の論旨に関わる「問い」と「答え」をかためることにあった。

セミナーでは、「答え」にあたる博士論文の終章を発表し、内容に関わるコメントと、論文全体の構成や「問い」の妥当性に関わるコメントの両方をいただいた。その内の一つに、私が発表した終章の内容は、すでに用意されている各章の内容とかみ合っていないのではないかという指摘があった。これについては、私も発表前から薄々感じていたのだが、セミナーを終えて、数日たったいま、ようやく「ああ、あれは全然かみ合っていなかったな」と素直に思えるようになった。

この心境の変化、自分の発想の「誤り」への気づきは、セミナー発表と質疑応答からすぐに得られたものではない。むしろ、自分の発表が終わり、「やっぱりかみ合っていないのか?」「しかしどうしたらいいのか?」と自問し続けながら、その後続くほかの受講生の報告を聞き、それに対する質問を聞き、自分も発言し、報告以外の時間にくださった雰囲気の中で受講生同士、あるいは、スタッフ・コメンテーターの方々と話をして、少しずつヒントが与えられ、それを議論して確かめ、自問自答を深めていくことで得られたものであった。

一筋の光明が見えてきたのは、セミナー終了の翌日のことである。自分がすでに書いた各章の結論をまとめてみて、そこに「答え」があると仮定し、それに合った「問い」を設定するという試みをしてみることを思いついた。「そんなの当たり前のことじゃないか」と言うことなかれ。その「当たり前のこと」を時に見失ってしまうのが、長い時間をかけて、手探りの中で、博士論文を書くことの難しさなのである。そして、この「わかった」が本物かどうか、これから書いてみなければわからないところもまた難しさであろう。

研究セミナーでやっていることは、普段、個々の受講生がそれぞれの大学や研究の場で、それぞれの先生や仲間とやっていることとそれほど代わりはないように見える。しかしこれはすごいことなのだ。思い返せば、初日の所長挨拶において飯塚先生が「ゼミのようにやっていきましょう」「発言は建設的なものに」とお話しになったが、本当にそのとおりになった。この意識がスタッフ・コメンテーターの間に徹底されていて、コメントは内容の不備を指摘するだけに終わらず、つねに「どうすれば良くなるか」が考えられていた。結果として、普段のゼミのような雰囲気が、普段のゼミのメンバーではない人たちの間につくられた。そうであるからこそ、私たちは、安心して悩みを打ち明け、心ゆくまで議論することができたのであろう。この点は、これからの研究生活においても見習っていきたいと思う。